

「福引きと福袋」

主任司祭 晴佐久 昌英

初めて入門講座に来た男性が、「ホームページで知りました」という。お住まいはどちらですかと聞くと、「すぐそこです」という。なんと、教会の門を出て数十メートル先の家だった。

つまり目と鼻の先に天国の門があり、キリストとの出会いがあり、永遠の命に入る機会がありながら、これまで何も知らずにいたわけだ。それでも彼はインターネットのおかげで教会にたどり着けたのだから、幸せだ。問題は、手を伸ばせば届くところに福音が山のように用意してありながら、それを知らずにいる無数の人たちが現実にいるという事実だ。

救いを求め、魂が飢え渴き、もう死にたいとすら思っている人がすぐ門の外にいるというのに、恵まれて救われた我々がどうして心穏やかに感謝の祭儀を捧げられよう。何度でも言いたい。ひと声かけてほしい。だれでもいいから連れてきてほしい。いのちの門の中へ。

恒例のバザーの名称を「教会まつり」と変えて、三年目。今年はいっそう、本気のまつりにしてほしい。名前を変えたのは、まつりの目的である「出会いと交わり」をいっそう強調するためである。このまつりで教会と出会い、キリストと交わる人がひとりでもいるならば大成功ということだ。みんなで大いに盛り上げよう。このまつりは、感謝の祭儀の門でもある。

地元杉並区の野菜を仕入れたり、福引きを充実させたり、一般の人に教会へ足を踏み入れてもらうための準備も始まった。福引きを引いているうちに、いつしか福音にも触れてもらえると信じている。これぞまことの、「福引き」。

いずれにせよ、まつりの意義はここに教会ありと知らせることにあるのだから、そのまつりすら知らせなかったら、それこそ救いが無い。あとのまつりである。普段は気後れして友人を招待できない人も、勇気を出して招いていただきたい。そのためのまつりなのだから。

今年も入門係は門前で風船を配る。子どもに風船を渡し、親には教会へのお誘いや講座案内の入った袋を渡す。今年はそこに福音を載せたプリントも入れることにした。神はあなたを愛している、と。これぞまことの、「福袋」。